

『ことばの発達を解く』

今井むつみ(著), 2013年, 筑摩書房, 東京.

親の経済格差が子供の学力格差を生み、子供の学力格差がその子の将来の経済格差を生むという議論があります。そして、これが循環されることで貧困層と富裕層の分離がいつそう強固なものになっているという主張が、ことあるごとにされています。その主張に異議を唱えるつもりはありませんが、この議論の中で一つだけ気になることがあります。それは、この議論が巷に降りてくる際に、問題の本質が教育への金銭的・時間的投資の問題にすり替えられてしまうことです。英会話などのお稽古事や塾に通わせるお金がないとか、親が働きに出ているので宿題を見てあげる時間がないというたぐいの話です。これはおそらく問題を単純化して見えやすくするという配慮のためだと思いたしますが、以前から「見えない学力」という名で岸本裕史氏が呼んでいた大事な問題を隠してしまうという問題もはらんでいます。

本書は、日本の認知科学の第一人者である著者が、言語習得の問題を通して、言語と思考の関係に迫ったものです。しかも、子供がことばを習得していく作業はその子が前もって理解し記憶している概念(や思考)に単語のラベルを貼っていくような単純な作業ではないという主張を解説するという難題を平易な文章でこなしています。(ちなみに、これがいかに難題であるかということは、このことが多くの言語学者にも理解されていないという現状からもうかがえます。)そしてこの単なるラベル貼り作業ではないという観察から、著者は概念の操作や思考といった人間の知的な活動の根源には、ことばの習得があると説いています。人間は、ことばを習得する作業を通して知識体系を作り、ことばによって抽象概念を理解し、ことばの助けを借りて推論を行うのです。

このように考えたとき、先ほどの経済格差と学力格差の因果関係の要因の中に、親と子の会話の量と質の問題を組み入れる必要があることがわかります。特に、貧困層の家庭では会話の量が少ないということが問題なのはすぐにわかりますが、それだけではなく、会話の質の低さが子供の知的活動に影響を及ぼしてしまうということを認識することが大切です。政治や経済、科学やモラルといったことを日ごろから話す家庭の子は、会話を通してことばを習得していきます。そして、そのことばを通して知識体系を作り、抽象概念を理解し、推論を行っていくのです。

ことばと経済力の関係を問題にすると、すぐに、「やっぱり、英語よね。」という話になってしまうこの頃です。でも、英語さえできれば、バラ色の人生が待っているというのは明らかに幻想です。日本に生きる僕らにとって知的活動の根源は日本語なのです。日本語の習得を通して知的体系を作り、抽象概念を理解し、推論を行っていることを忘れてはいけません。これだけ英語が幅を利かせている世の中でも、それでも、知識人たちが、「日本語だ」と言い続けるのにはわけがあります。日本語のレベルがその人の知恵の高さを支えるからです。もちろん、他の言語を学ぶことを通して、日本語の論理とは異なった世界観を学ぶという点では外国語を学ぶことは、本書の主張と照らし合わせても大変意義のあることです。ただ、ペラペラの英語と引き換えに日本人の知力が低下することは避けなければなりませんよね。(文責:町田章 2018年1月8日)